

お兄ちゃん かつこいい

茨城県 筑西市立養蚕小学校 六年

高崎 たかさき
利基 としき

『お兄ちゃんは、バカだ。』

ぼくは、ずっと、そう思ってきた。イメージ的には、『ありときりぎりす』というお話のきりぎりす。何の努力もしないで、やりたいこと、楽しいことばかりして気楽に生きている。勉強している姿なんて、ほとんど見たことがない。そんな高校生の兄にお説教される日が来るなんて、考えたこともなかった。

それは、今年の夏休み。ぼくが、英語の予習をしているときのことだった。CDを聞きながら発音練習をしているほかに、母が、

「そんな棒読みじゃなくて、抑揚をつけて。」
と言った。

「抑揚って何？」

「強弱をつけて読むんだよ。」

「強弱って？」

「調子を上げたり下げたり……。とにかく、CDのまねして、歌うみたいにするの。」
だんだんいらだたせてくる母。

「わかんないよ。できないよ。」

ぼくは、大声でさけぶと泣き出した。

兄は、すぐ、二階から下りてきてくれた。

「利基。今習っている英語は、基本中の基本。だいじょうぶ。すぐ、できるから。」

兄は、めずらしく真面目な顔で言った。それからいつものおどけた兄になり、教え始めた。

「英語なんて、のりのりで言っちゃえばいいんだよ。ハローハロー。マイネイムイズ・トオシイキイ。『トシキ』じゃなくて、『トオシイキイ』だよ。オッケー？」

ひよっとこみたいな表情の兄。ほくは、思わずふき出してしまった。そして、

「トオシイキイ。トオシイキイ。オッケー？」

とやってみた。ふざけて言っただけなのに、

「すつげえ。ちゃんとできるじゃん。完べき。」

兄は、大げさにほめてくれた。

兄と英語を勉強するのは楽しかった。まるで、まんざいでもやっているようだった。そして、ほくは、英語が上手になった気がしてうれしかった。

「お兄ちゃんて、英語できたんだね。」

「おいおい。本当に、ただのバカだと思っていたのか。ちよつと待ってる。」

兄は、二階から、小さな袋を持ってきた。中から出てきたのは、ボロボロになった単語カードだった。きたない字で書いてあるのが、兄らしい。少しの沈黙の後、兄が言った。

「利基。いいか、よく聞けよ。完べきじゃなくていいんだ。全部できなくてもいいんだよ。でも、やるって決めたことは、ちゃんと頑張らなくちゃだめだ。それから、男は、人が見ていない所で努力をするもんだ。」

「お兄ちゃん、かっこいい。」

思わず言葉がこぼれた。今までに見たことのない、すごくかっこいい兄だったのだ。ほくは、大好きだった兄がますます好きになった。

お兄ちゃん、いつもありがとう。大好きだよ。これからも、ずっとずっと、よろしくね。